『ごんぎつね』のふるさと半田より

新美南吉記念館館長
矢口 榮

はじめに

「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」という兵十の言葉とともに、銃の筒口から細く立ちのぼるひと筋の青い煙、この『ごんぎつね』のラストシーンは、これまでどれだけ多くの読者に深い感銘を与えてきたことでしょう。

新美南吉がこの代表作『ごんぎつね』を書いたのは、十八歳の時でした。これが、昭和三十一年から教科書に採り上げられるようになり、以後五十年を越え、今も日本じゅうの子どもたちに読み継がれています。

新美南吉記念館は、この『ごんぎつね』の舞台となった土地に、南吉の生誕八十年を記念し、一九九四年、半田市によって建てられました。屋根に芝が植えられ、五つの棟が波打ちながら地下へもぐり込むように造られた半地下式の記念館は、そのユニークな造形で来館されるみなさんの目を楽しませています。

今回はこの記念館を中心に、南吉が子どものころから慣れ親しんだゆかりの場所を、彼の書き残した主要な作品とともに紹介させていただきます。

新美南吉記念館（名鉄半田口駅から一、二〇〇m）

記念館の展示室では、南吉の小学生のころから半田中学時代、東京外国語学校時代、そして晩年の安城高等女学校時代と、南吉がその時々に書き残した自筆原稿・日記・書簡などとともに、その生涯を見ることができます。

また、南吉の蔵書なども含めた約一万冊を収蔵する図書閲覧室、ビデオシアターや視聴覚コーナーなどにより、南吉とその文学を多面的に楽しんでいただけるようになっています。

岩滑小学校（記念館から四五〇m）

南吉の母校であり、半田中学を卒業した年に一学期だけ代用教員として勤めた学校でもあります。校内には権狐碑や落葉詩碑と、詩にちなんだ烏臼（ナンキンハゼ）の大木などが見られます。『嘘』『貧乏な少年の話』『屁』などといった作品に登場します。

光蓮寺（小学校から三〇〇m）

南吉は、子どものころ、この寺の住職からお経を習い、東京外国語学校を受験する際には英語の書き取りを見てもらったりしています。また、亡くなった時には、釈文成という戒名までつけてもらうなど、光蓮寺は南吉にとって、子どものころから亡くなるまで大変縁の深い寺でした。『ごんごろ鐘』『百姓の足、坊さんの足』に登場します。

生家と常夜灯（光蓮寺から四〇〇m）

南吉の生家の前には、一八〇八年建立の常夜灯があり、生家のよい目印になっています。

生家は、向かって右側に父多蔵が営んでいた畳屋跡が、左側には継母志んが営んでいた下駄屋の跡が今も残されています。奥に入ると、斜面を利用して作られた、地下室を思わせる勝手場に下りていけるようなおもしろい造りになっています。音声による案内もあり、生前の南吉をしのびながら自由に見学することができます。『狐』『雀』『帰郷』『花を埋める』『音ちゃんは豆を煮ていた』など、たくさんの作品の舞台となっています。

八幡社（生家、常夜灯から一五〇m）

南吉は、朝夕、弟の益吉とこの神社の境内を通っては、生家と常福院の前にあったはなれの家とを行き来していました。

『ごんぎつね』の草稿は、この神社の境内にあった若衆倉の前で、茂助というお爺さんから聞いた話として創作されています。『狐』は、この八幡社の春の夜祭りを、隣村の七人の子どもたちが喜々として見物に来る話です。『久助君の話』『疣』などにも登場します。

常福院（八幡社から五〇m）

岩滑城主であった中山勝時の菩提寺として、十六世紀中ごろに建立された寺です。戦前は境内で盆踊りが行われ、南吉もよく踊っていました。『ひよりげた』『久助君の話』『塀』などに登場します。

矢勝川（常福院から三〇〇m）

常福院の北側を流れる川です。背戸川とも呼ばれ『ごんぎつね』の兵十がうなぎをとっていた川とされています。秋になると、百万本を超す彼岸花が川沿いに咲き誇ります。ごんぎつねの名前の元になったのではないか、と思われる権現山を間近に見ながら、川の堤を一、一〇〇mほど散策すると、ごんの橋を経て、また記念館へ着きます。

おわりに

以上、半田市内には南吉が子どものころから慣れ親しんだ場所のほかに、養家（南吉が八歳の時養子に出された実母りゑの実家）、半田高校（旧制半田中学。日記碑、少年と狐の像あり）、雁宿公園（詩、貝殻碑あり）、半田池（『おじいさんのランプ』の舞台）、南吉の墓などがあり、希望に合わせて時間と場所をアレンジし、文学散歩を楽しむことができます。記念館へのみなさまのご来館をお待ちしています。

新美南吉記念館（http://www.nankichi.gr.jp/）